
火焰戦記—FLAME OF RECORD—

八月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

火焰戦記―FLAME OF RECORD―

【Nコード】

N0459C

【作者名】

八月

【あらすじ】

もう一つの地球で起こったもう一つの第二次世界大戦。その最中、列強国の矛先は太平洋に向けられる。これはそうした国々に無謀ともいえる戦いを挑んだ小国の記録である。

第巻話：帝國の急襲

小笠原諸島沖合一三〇〇キロメートル。ここに火炎島という本州ほどの島が存在する。

西東（江戸）時代中期に発見され、以後火円藩がおかれ琉球のよきに貿易で栄え、第一次世界大戦末期に大東亜帝国の属国という形で火炎国建国、大東亜帝国の半植民地となったが、国内で独立運動が盛んになり一九二一年には火炎共和国として独立した。

以後、豊富な資源を背景に欧米諸外国とも積極的に貿易し、高度な技術と文化を得た。

そして、以前と変わらぬ平和が訪れようとした、はずだった。

時は世歴（西暦）一九四一年一月一〇日。

大東亜帝国が北米連邦に宣戦布告した5時間後……

午前七時八分 火炎共和国、首都・紅城。統合軍総司令部――
普段は落ち着きのある司令室だが、今回はかなり慌しい。

「敵攻撃機部隊確認！数は、五十！いや、百！」

「防衛艦隊をそっちへ向かわせろ」

十五分前、複数の機影が確認され同時に哨戒任務中の潜水艦が大東亜帝国の機動艦隊を発見した。

「駆逐艦・日暮から電信。ワレ、敵艦見ユ」

「哨戒機、撃墜されました」

管制官、各司令官たちが指示している中、総司令と副司令だけは冷静だった。

「とうとうきましたな、司令。やはり……」

副総司令官の早見が表情も変えず、聞いてきた。軍総司令官の久村は腕組をして黙り込んでいる。

「司令！迎撃部隊の出撃許可を」

管制官の一人が聞いてきた。

「許可する。ただ、その内十機は首都防衛に当たらせろ」

「確認取れました。間違いなく大東亜帝国海軍第一航空艦隊です」

「数確認。空母三、戦艦二、巡洋艦三、駆逐艦六」

係員が報告した瞬間、久村は立ち上がった。

「皆よく聞け。たった今、この国の親とも言える大東亜帝国が攻撃を仕掛けてきている。皆の中でも祖国を思う者は居るはずだ。だが祖国は、帝国は我々を裏切り、攻撃しようとしている。負ければ我々は全ての権利を失うだろう。だからこそ国の威信を懸け、全力で迎え撃つ義務がある」

管制官達は一斉にうなずくと敬礼して職務に戻る。

「これなら確実に士気が上がりますな、司令。自分も最期までお供します」

久村は軽く微笑み、すぐに指令を出した。

「響艦隊と廻林艦隊を出せ。相手は攻撃が終わる前に引き上げるが、また戻ってくるだろう」

そう言って、入れたてのコーヒーを一気に飲んだ。

久村の勘はかなりの高確率で当たる。ただし、勘で熱々のコーヒーを飲むのは危険すぎた。結局、久村は舌にやけどを負って、以来ホットコーヒーを飲まなくなったのは言うまでもないだろう。

同時刻、大東亜帝国海軍、第一航空艦隊旗艦・正規空母赤城、艦橋……

「第二波空中攻撃部隊の準備だ、急げ」

第一航空艦隊司令長官、南雲忠一中将は紺碧の海を眺め、自信たっぷりに言った。

真珠湾攻撃があまり見事に終わり、すこし浮かれたのかもしれない。もうじき第一波空中攻撃部隊が作戦を開始する時刻だ。

「作戦開始後すぐに第二波攻撃部隊を上げ、それぞれの目標へ。別働隊は山脈から進入させて、首都へ向かわせろ」

下賤者どもの集まりが。我々が叩き潰してくれるわ。

午前七時二二分、大火炎共和国西部地方都市・沖野市……

ここには国内最大の鉄鉱石採掘場があるほか、それに隣接している製鉄所も国内最大で、多数の工場がある。

肌寒い朝の静寂を切り裂くように空襲警報が鳴り響いた。初めは訓練と住民も思い込んでいた。しかしその直後、地響きにも似た音が聞こえ日の丸を刻んだ鉄の鳥の群れが。第一航空艦隊の第一波空中攻撃部隊である。

大東亜帝国が誇る零式艦上戦闘機は低空で接近し、機銃掃射の態勢に入っていた。そのときだ。三十機の戦闘機が閃光のごとく現れ、機銃を乱射し、街の上空を飛び去る。それを見た住民たちから歓声が沸いた。これこそ火炎共和国が誇る最新鋭艦上戦闘機、一式艦上戦闘機“旋火”だ。

まず隊長機が先陣を切り、迎撃隊が続く。大東亜の零戦はその機動力を生かして格闘戦をしてくる。だが旋火の方が速度的に有利だ。強力な破壊力を持つ機関砲により数発で火を噴く帝国軍機。零戦の防御力という弱点を狙った連続ヒットエンドラン攻撃により、十数分後、第一空中攻撃部隊は壊滅、生き残ったのは約三分の一だった。

同時刻、中央山脈上空……

雪化粧をした山脈の上空はなんの障害もなかった。

まさかの挟み撃ちになすすべも無く、司令部は壊滅。後は陸軍が煮るなり焼くなり好きにするだろう。

「いいシナリオだ……」

そう呟いて、ニヤリとした隊長はこの後自分たちがどんなに愚かかを思い知ることとなるのは言うまでもない。

その五分後、別働攻撃部隊が待ち受けていた旋火により全滅したことも……

十分後、第一航空艦隊旗艦・空母赤城、士官室……

「第一波空中攻撃部隊が壊滅だと。被害は」

南雲は報告を聞いて啞然とした。

「第二波空中攻撃部隊も目標の遙か手前で壊滅的打撃を負い、別働攻撃部隊は……」

「なっ、なんだと。こちらの手が読めていたとでも言うのか！」

さっきの余裕綽々な南雲は見る影も無かった。

南雲は、狂ったように空のマグカップを床に叩き付け、机を何度も叩いた。

その赤く、血の気の立った顔からは恐ろしいほどの殺気が漂っていた。

「噂では聞いていたがまさかここまでやるとは。ええい、今度こそ叩き潰してくれる！」

その後第一航空艦隊は戦艦金剛を旗艦とした第一艦隊と合流、補給をし、再度火災共和国攻略作戦を展開しようとしていた。

だが、突如本国から帰還せよとの命令を受けた。米国も近いうちに動き出すと推測した軍令部からだ。断るわけにもいかない。

「私の顔に泥を塗りおって。次こそ、あの下賤者どもを地獄の業火で焼き払ってやる」

そう言って彼は命令を出し、帰路についた。

復讐を誓って。

同日、午前九時 火災共和国、首都・紅城。統合軍総司令部――「哨戒機によると敵艦隊は回頭ののち、北上を開始。帰路についているそうです」

司令室の緊張が僅かに綻ぶ。司令長官も胸を撫で下ろした。

「旋火は配備直後で少々焦ったが、上手くやってくれたようですね」副長も安心したようだ。

「皆の働きで、今回はどうにか敵艦隊を追いつ返すことに成功した。だが、これで終わったわけではない。これは始まりなのだ。この戦

闘によって、我々は帝国を完全に敵に回してしまった。彼らが国連脱退以降、軍拡を強要してきたことは皆も分かっているだろう。北米連邦は我々の支援のため、着々と艦隊を送っている。到着するまでの数週間、この攻撃を耐え忍んでほしい。この戦、我々が勝つ！絶対！」

久村は早くも次の攻撃を予感していた。次の戦いは長くなりそうだと。

第壱話：帝國の急襲（後書き）

アメリカ合衆国↓北米連邦

大日本帝国↓大東亜帝国

第弐話…始まりの戦火

世歴一九四二年一月一日 火炎共和国領・南鳥島沖合一三〇キロメートル―

青々とした白波立つ海に、漆黒のシルエットが浮かぶ。四基の砲塔を構えたそれは共和国の誇る戦艦”雲河”^{くもがわ}である。

一九三〇年代、共和国は北米連邦や帝国海軍に対抗するために共和国海軍は大型戦闘艦を含めた沿岸警備船の配備を開始した。当時、国際的に共和国の軍事的存在力は菲薄だったため、ワシントン・ロンドン軍縮会議の対象とならなかった。そのため、海軍は当時の最新設備を惜しみなく注ぎ込み、大型艦の建造に尽力できた。共和国随一の戦力を誇る廻林艦隊旗艦である雲河もそんな新型戦艦のひとつだ。

穂坂信一艦長はその慌ただしい艦橋内の中央で指揮していた。その隣に座っているのは廻林艦隊司令長官の三池八郎少将だ。

「君の心境はどうだね？ 私はまだ、起こっていることが信じ難いのだが……」

三池が聞いてきた。突然の問いだ。慎重に言葉を選び、答える。

「おっしゃる通り、私も貴方と同じ心境です。私たちには討てないかもしれません。……申し訳ございません。このような無礼なことを長官殿の前で」

「いいのだ、気にするな。ただ、これが戦争ということなのは確かだ」

これまで共和国領海には幾度となく帝国所属の潜水艦が進入してきた。だが帝国の襲撃直後から潜水艦は一気に姿を消してしまった。これを不審に思い、哨戒のために司令部は艦隊の出撃を命じた。まだ水兵の間では本当に敵は帝国軍なのかという疑問さえあった。

戦争というものは恐ろしく、たとえそれが同類であろうと、敵であれば容赦なく殺し合う。

殺戮を犯しても、罪を償うどころか母国では英雄となる。そして、新たな憎しみ呼ぶ。

「破壊は憎悪を呼びそして、復讐する……。それが戦争という物なのだ。それが……」

「人間の本性ですか……」

三池は顔しかめて頷きながら前方に広がる蒼い海を眺めた。冬の海は少し荒れており、白波が立っては消えていった。

穂坂は横目で司令長官の横顔を見た。顔には深々としわが刻み込まれてあり、老長官の勇姿にぴったりだ。

「戦争は人間だけに感染する伝染病のようなものだ。感染すれば罪も無い人々も犠牲になる……」

三池は表情も変えず海を見つめながら、小声で呟いた。直後、見張りの水兵から敵発見との報告が飛び込む。異常に気付いた副長はすぐに双眼鏡を用意し、穂坂と三池に渡した。水平線を這うようにして進む黒点。その大きさは近づくにつれ、すぐに判る。

「第一種戦闘配備！！ 急げ！ 敵はすぐそこだぞ！ レーダーはどうした？」

穂坂が叫ぶ。この最新型戦艦には他の艦船を遙かに上回る高性能レーダーが備わっているのだ。とは言っても初期のレーダーには変わりなく、一度敵を捕捉しないと使えないという欠点があった。

「範囲外です。あと二キロメートル近づかないと！」

レーダー担当員が叫んだ。穂坂は舌打ちをして、

「最大戦速！ 取り舵一杯！」

副長が復唱し、艦は左へ傾き、曲がり始めた。

「とうとう来たか。全空母に打電。航空機部隊を出させろ。同じ人種が争う。なんと愚かなことか」

三池は呟く。双眼鏡に映ったものの、それは紛れも無く大東亜帝国所属の第一航空艦隊であった。

「他にも艦影多数！」

見張りが叫ぶ。

「レーダー起動完了。反応新たに戦艦四、空母五、重巡五、駆逐艦十！」

レーダー担当がおおよその大きさを読み取り、報告する。

「結構な戦力を出してきたな」

三池はスクリーンの中の移動している点を見つめた。

第一航空艦隊旗艦・空母赤城、艦橋……

「来るなら来い。先の無念、此处で晴らしてやる！」

南雲はそう言って殺気立った不気味な笑みをもらした。

帝国への帰還後、南雲は軍令部へ出頭した。総司令長官である山本五十六は南雲から伝えられた共和国の技術力に驚いた。危機を覚えた山本はすぐに各分野の知識人を集め、会合の末、北米連邦より火炎共和国を攻めるという決定に至った。また、これには陸軍も賛成し、制空権さえ奪えれば多数の爆撃機及び空挺師団を派遣できるという。

つまり、この海戦で勝利し、限りある海戦力を奪えば後は陸軍がやってくれる。

「攻撃部隊出撃！」

第一航空艦隊から次々と攻撃隊が放たれていく……。同時に小笠原方面からの一式陸上攻撃機も低空で飛び去った。

一方、廻林艦隊からは遠くの味方機動艦隊から次々と航空機部隊が飛び立って行くのが見えた。三池はそれを眺めつつ言った。

「全速で敵艦隊へ向かえ。実用試験だ」

「機関最大全速前進！ 対空、対潜警戒厳に！」

物好きな指揮官だと思いつつ命令を出す穂坂。三池の実用試験とは如何なるものなのであろうか……

数分後、蒼穹の空の下、無数の航空機が入り乱れ巨大な鉄の蚊柱が出来ていた。大東亜帝国と火炎共和国双方の飛行隊が衝突した瞬間

間だ。

その中の一機に城島信吾という男が乗っていた。十五歳の時、海軍航空隊へ志願し直後にその才能を開花させた彼は二十歳にして大東亜帝国のエースパイロットとなった。熟練パイロットをも凌ぐ腕前を魅せる彼は帝国海軍内でも恐れられていた。

「来たか。よし、第二小隊は右から第三小隊は回りこめ。第一、第四小隊は俺に続け！」

愛機である零戦はエンジンを唸らせ味方機と共に火炎共和国攻撃隊へ襲い掛かった。

同刻、火炎共和国主力攻撃機・青天は向かって来る無数の迎撃機を必死でかわしていた。

「護衛の旋火はまだか！ このままでは……」

操縦士の住田が攻撃をかわしながら嘆いた。

「大丈夫ですよ。すぐ来ます、多分」

射撃手の小野寺が励ましたその直後、頭上を味方の旋火が通り過ぎ、敵を掃射する。

「やっと来たか。よし、船狩りの始まりだ」

住田は操縦桿を倒し、アクロバットさながらの腕前で機体を急降下させた。

廻林艦隊旗艦・戦艦雲河、艦橋……

いつもは生新しい広々とした部屋だが、緊張のせいかなり狭く感じられた。

艦長の穂坂はてきぱきと判断し、指示を与えていた。

「敵機多数接近。大型機も来ます！」

レーダー担当と見張り係が同時に叫ぶ。

「対空戦闘ヨーイ」

前方には旋火に落とされながらも五十機近くの爆撃、雷撃隊が見えた。

「レーダー担当、敵の動きは？」

「真っ直ぐこちらへ向かってきます」

「よし、射程に入り次第対空レーダー射撃を開始する。時限信管で式式空中焼夷散弾転送、砲撃準備！」

式式空中焼夷散弾は共和国軍が開発した対空砲弾である。一瞬にして敵機を焼き尽くす強力な砲弾だがコストが高く、一度の戦闘に十回ほどしか撃てない。

艦橋の緊張が一気に高まった。帝国の一式陸攻が海面すれすれで向かってくる。

「とうとう始まるのか……。味方航空部隊を退避させろ」

「射程、入ります！」

「面舵一杯！一番、二番ヨーイ！」

雲河の巨大な砲塔がスムーズに動き敵航空部隊を捕らえる。つられて別の戦艦の砲塔も動く。

「撃てーッ！」

直後に凄まじい爆発音とともに主砲が火を噴いた。式式空中焼散弾が打ち上げ花火のように天に昇ってゆく。

直後、砲弾は右前方で炸裂。一面の空が火の海と化す。後に残ったのは澄み切った青空と鉄粉だけであった。

「レーダー射撃成功です！一気に敵の戦力を削ぎ落としました！」

レーダー担当が興奮を必死にこらえながら言った。何とか回避した一式陸攻も落ちてきた破片によって次々と墜落する。

「全艦へ打電。ワレ、レーダー射撃に成功セリ」

「敵大型機一、こちらに向かっています！」

黒煙の中から生き残った一式陸攻が艦隊へ向かってきた。各艦から対空掃射をうけ、エンジンが火を噴きながらも魚雷を投下。直後、機体は海中へ没した。

放たれた魚雷は真っ直ぐな軌跡を描いて巡洋艦へ突入。巨大な水柱があがる。

「巡洋艦羽柴、左舷大破。戦線離脱を求めています」

「許可する。駆逐艦を護衛に就かせ、救助をしつつ帰還せよ」
三池は墜落した攻撃機の尾翼に描かれた日の丸を見つめた。
その後も帝国は波状攻撃を仕掛けたが他の戦艦からも続々と砲弾が放たれ、攻撃隊の姿は無く戦果を挙げた機体は稀だった。
なぜなら間一髪空中焼夷散弾をかわした機体も待ち構えていた旋火と対空弾幕の餌食となったからである。

その頃――

「くっ！小ざかしい鳥め！」

城島はそう言いながら操縦桿を引く。零戦は宙返りし、二〇ミリ機銃弾が火を噴く。同時に旋火の主翼の付け根あたりへそれが突き刺さった。途端に旋火は主翼の付け根から真っ二つになり、墜ちてゆく。

その隣で味方機が爆発。城島は舌打ちして操縦桿を倒した。

攻撃隊は――

「見えたぞ。小野寺、投下準備しておけ！」

「了解！」

小野寺は潜望鏡のようなものを引き上げた。これこそ青天の最大の武器である27型光学照準機である。

これは魚雷の視点から目標を狙うという画期的なもので、訓練では百発百中の命中力を誇った。

「行くぞ！全機、俺に続け！」

彼らは超低空飛行で弾幕を突破し、後から多数の攻撃機が続いた。

第一航空艦隊旗艦・空母赤城、艦橋――

「下賤者どもが。叩き落してくれる！」

南雲は余裕であった。が……。

「敵機機接近！！こちらへ向かってきます！」

「弾幕をかわしただと？！ええい、対空戦闘用意だ。予備の零戦

も上げろ！　なぜだ、最強の戦闘機といわれた零戦からなぜ簡単に逃れられるのだ」

南雲は焦っていた。勝たねば、未来永行彼らに名誉は無い。

「敵機魚雷発射！」

副司令の言葉で南雲は我に返った。

「何をしとる、回避！」

遅かった……。

共和国攻撃隊、青天の放った魚雷二十本中、十五本が空母赤城の左舷へ直撃。傾いて炎上する艦橋の中で南雲はつぶやいた。

「なぜだ。なぜこれほどの戦力を所持しているにもかかわらず負けるのだ。なぜ……」

直後に魚雷うちの一本が爆薬庫で炸裂、大爆発を起こし赤城は爆沈したのであった……。

廻林艦隊旗艦・戦艦雲河、艦橋――

司令官の三池と艦長の穂坂はレーダーを食い入るように見つめていた。他の点と比べて少し大きめの点が消えた。両者は安堵し、他の要員からは歓声が上がる。空母赤城を撃沈させた瞬間であった。地平線で黒煙が上がっている。

「我が艦隊も大した損害も無く航行できるのは君のおかげだよ。感謝する」

三池はレーダー担当に感謝の言葉を言った。

「いえいえ、身に余るお言葉です。長官」

「しかし、長官。これで終わったわけではありません」

三池は我に返り、すぐに親しい老人から真剣な趣の老長官へと早変わりした。

「第一艦隊か……」

穂坂は無言でうなずいた。三池が聞く。

「今どこにいる」

「左前方、北西へ航行中」

「さて、艦長の意見はどうだね？」

「深追いは無用かと。我々も少なからず被害は出ています」

「わかった。我々はこれより救助活動をしつつ本国への帰還の途に就く」

三池は茜色に染まった空を眺めた。

一週間後、大東亜帝国帝都・東京、軍令部――

「さてと。先の海戦の件なのだが、敗因は何だと思う？」

連合艦隊司令長官・山本五十六は今後の作戦について会議を開いていた。

「第一艦隊の戦線離脱だ。逃げ帰るなら戦って沈んだ機動艦隊の方がよっぽどましだ」

と言うのは航空参謀で航空主兵論者の源田実である。

「何？そちらこそ大型空母と一式陸攻を導入させておいてあのざまではないか！」

反論するのは参謀長で大艦巨砲主義者の宇垣纏だ。

「なんだと？！私は絶大な破壊力と防御力を誇る戦艦をなぜ帰還させたかと聞いておるのだ」

源田は宇垣の反論をそのまま返した。

「こちらの都合が悪かったただけだ。あのような出来損ないの艦など、次は一撃で沈めてくれる！貴様らこそよくハエの様なもので戦えるものだ！」

「何を言う！貴様らこそ、そのような鉄の塊でよくここまで来られたものだ」

「貴様らは東郷元帥のご理念を忘れたのか！！」

いつの間にか作戦会議室内は罵声が飛び交っていた。そこへ山本の一喝。

「黙れ！　ともかく第一艦隊が戦力不足だったのは言うまでもないだろう。技術面、戦力面から見ても戦力を温存する方が理に適っていたのだろう。しかし、海軍期待の一式陸攻で歯が立たなかったと

いうのもどういうことか。だが、打開策は必ずあるはずだ……」

山本には余裕があった。それは超極秘で建造中の戦艦に期待を寄せているからであった。

同刻、ドイツ第三帝国領・エジプト――

北アフリカに展開中のイギリス軍は本国が第三帝国軍に占領されほとんどが降伏したが、ゲリラ化してナチスに抵抗している者もいた。ハリス・ロードもその一人だ。

「ナチ野郎どもは撒いたか？　よし、このままナイルへ向かう……」

ロードたち第二独立戦車師団は補給のためナイル川へ向かっていた。無数のピラミッドの破片が散らばっている。ロードたちは破片に偽装している戦車を見落とさないように必死で目を凝らしていた。その時である。一台の戦車が飛び出てきた。側面にはカギ十字マーク。

「戦闘準備！　目標、敵ⅠⅠⅠ号戦車！」

ロードたち第二独立戦車師団のクルセーダー巡航戦車は一斉に砲身を動かした。

敵戦車もようやく砲塔を動かし始めたが、遅かった。クルセーダー巡航戦車から放たれた砲が敵戦車の装甲を打ち抜き爆発、炎上。その時であった。

遙か地平線の彼方に暁の太陽を背にして何かの影が見えた。一目見ただけでは飛行船だ。だがそれは違う。

「あいつが、後方部隊を一撃で消滅させた、天空の破壊神なのか……」

異様なシルエットが一瞬光る。その光景がロード達の目に焼き付くことはなかった。

第参話：破壊神 爆誕

世歴 一九三五年二月一四日、ナチス・ドイツ第三帝国・ベルリン――

「これがイタリアの海底で発見された古代の戦艦なのか？」

幻灯機に映された巨大な岩のようなものにナチス・ドイツ総統、アドルフ・ヒトラーは目を見張った。

表面には苔などが張り付いているがそれでも全長二百メートルはあるという船体に巨大な翼、両側の巨大なエンジンなどが確認できる。艦首には巨大な砲のようなものが上下二基ずつ。剣の様なその外観はまさに要塞。下部にいる作業員が蟻のようだ。

「それにしてもでかい。本当にこんなものが海底から引き上げられたのか。信じられん」

側近のハインリヒ・ヒムラーは桁外れの大きさに半信半疑だった。「これぞ古代の超技術というもののなのか。ジュベール君、この戦艦は一体何なのかね？」

ヒトラーが問い、技術者のハイド・ジュベールは恐る恐る言った。

「調査の結果、形状からして恐らく飛行船かと」

「飛行船だと？ こんなものが空を飛ぶとでもいうのか。馬鹿馬鹿しい」

空軍元帥のヘルマン・ゲーリングは嘲笑する。

「しかし、我々のツェッペリンとは全く違うようだが」

「はい。これは従来の飛行船のような気囊を使ったものではありません。簡易的な調査の結果、両舷の飛行船のようなものから凄まじい電磁波が出ています。この影響で多くの機材と五人の人命を失いました」

「うむ。彼らは大いなる犠牲として後世に名を残すであろう。問うが、本格的な調査にはどれぐらい時間がかかるかね？」

「少なくとも数年以上は……」

「よろしい。本調査は我がドイツの最高国家機密とし、必要があれば随時、私へ報告するように。ムッソリーニには適当に理由をつけて口止めしておけ。ナチスの技術でなければこれがどういったものなのか見当もつきはしないと」

実際、現段階ではヒトラーでさえ、この戦艦の真の価値は半信半疑であった。

月日は流れ、世歴 一九四二年一月二四日、ナチス・ドイツ第三帝国帝都・ベルリン――

「総統閣下、準備がととのいました」

「よし、D作戦を発動させろ。ソビエトを叩く」

ヒトラーはしばらく官邸から帝都・ベルリンの朝の風景を眺めていた。

超古代戦艦の研究は困難を極めるものであったが、その利益はとてつもなく大きいものであった。

しばらく経って重爆撃機・He 277と共に新型空中戦艦・デストロイアが姿を現す。

ヒトラーはいつの間にか不気味な笑みを漏らしていた……

十時間後、ソビエト社会主義共和国連邦首都・モスクワ上空……死の魔物はとてつもない爆音をたてて首都上空へ達していた。

「目標上空に到達。N1、投下準備完了」

「後部格納庫開け」

空中戦艦・デストロイア艦長のゲオルグ・ガーラーは狭いビスマルク級戦艦の艦橋とは比にならないほど広大な総合司令室（艦橋）を見回し、机の上の画面に視線を戻す。画面中の緑のデストロイアの後部格納ハッチがゆっくりと開く。

「爆撃隊は全速で後退。N1投下用意！」

N1、それは古代戦艦から得た史上最強にして最悪の兵器。

「各ブリッジ遮閉。エンジン出力最大。N1、射出！」

静かな時が流れ、N1という爆弾はソ連の心臓へ……次の瞬間、夜の首都モスクワとその周辺が光に包まれ、ベルリンからでもわずかだが一瞬明け方のように明るくなる。

もちろんそれは超高温の熱線と放射能の光、“核の光”だ。光が消えた頃、そこにあった首都は消滅し代わりに今なお放電が続く超高温の赤いクレータがあった。直径四〇五キロメートルはありそうである。それと共に周囲を飛んでいた味方爆撃隊の姿も無くなっていた。

「こ……これが……超古代技術のそして、N1の威力なのか……」

ガーラーは放心状態でつぶやいた。

同刻、ナチス第三帝国帝都・ベルリン――

総統のアドルフ・ヒトラーは“核の光”を眺めて、不気味に笑いながら宣言した。

「素晴らしい……我は大いなる支配者なり！　世界に闇を、我に光あれ……！」

翌日、

一方、大東亜帝国広島県・呉、帝国海軍呉基地

月夜、軍港の闇にまぎれ、複数の影が潜んでいた。

「隊長、全小隊潜入完了しました。」

「第五、第六小隊は看守を。第七小隊は爆薬設置。第二、第三、第四小隊は第一小隊とともに予定通り作戦開始。ヤツを奪取する。」

しばらくして、美しい満月の夜に銃声とけたたましいサイレンと複数の爆発音が鳴り響く。そして、火炎共和国第一特殊小隊の木村隊長を先頭に次々と目標の大型戦艦に乗り込んだ。

「占拠完了しました。」

異常に気付いた陸軍部隊が一斉に基地内へ流れ込んでくる。

「これより離脱する。全速前進、沿岸砲撃地帯を突破する。第五機

動艦隊に打電、航空支援を要請しろ！一番、二番ヨーイ。撃てーッ！

強奪した大型戦艦から続々と砲弾が放たれる。陸上砲台からも撃ってきたが、戦艦には効かない。戦艦から放たれた砲弾のうち一発が陸砲に当たり凄まじい轟音を上げながら爆発した。

豊後水道を抜ける頃には攻撃機や爆撃機が襲ってきたが、間一髪のところでは共和国海軍の第五機動艦隊の護衛部隊に合流、被害も最小限に収まり、作戦は見事成功した。そして、その戦艦は火炎共和国へ向かった。その艦名は、大和ー。

第四話：東の間の休息

世歴一九四二年六月二日、大火炎共和国東部地方都市・瀨鷹、共和国海軍瀨鷹基地……

廻林艦隊旗艦・戦艦雲河を始めとする大小さまざまな軍艦が並ぶ中、一際目立つ戦艦がある。

「ロランド沖海戦からもう半年か……」

響艦隊司令長官、巖伊 忠弘はその大型戦艦を眺めながら言った。あの戦闘以来、帝国海軍はシベリアと東南アジア攻略に勤しみ、共和国には爆撃機を送るだけで大きな戦闘はなかった。北米連邦海軍機動艦隊が味方についたこともあるのだろう。その北米連邦海軍だが、彼らは欧州戦線に釘付けで大東亜帝国など眼中にないよう思えた。

「まさかあそこまで警備が手薄だったとは。こちらも、見くびられたものだ」

かつて大東亜帝国海軍聯合艦隊旗艦を勤めていた世界最大の戦艦・大和。極秘作戦・Yで強奪、今は大火炎共和国海軍廻林艦隊次期旗艦として大規模な改装工事が行われている。

司令部は小高い山の斜面にあり軍港からはすこし離れているが、そこからでも十分迫力はあった。

「しかし、東帝はまだ攻めないのか。シベリア及び豪州戦線は優勢で、陸軍は豪州上陸を成功させたようだ」

「いいや、攻めて来るさ。敵も随分余裕なものだ。しかも政府は軍と財閥が牛耳っていると言っても過言ではない」

ただ国民はひどい状況らしい。食料輸入禁止と飢饉で餓死者が増え、経済状況は最悪。おまけに在東帝の火炎国民は非国民扱いだ。

「今頃、我が政府の役人は北米でルーズベルトに胡麻をすっているところだろう。彼らも相当な軍備は揃えていると聞いた」

「ああ。条約開けと共に一気に軍備増強したよ。大型空母に高速戦

艦、航空機の大群。東帝も馬鹿なものだ」

一呼吸置いた後、巖伊は欧州戦線に話題を移す。

「欧州戦線だが、ソ連の半分を制圧した独軍はアラビアと交渉を開始したらしい」

「当然の結果か。上得意が居なくなった今、最大の消費国は第三帝国だからな。イギリスもこの間、落ちたそうだ」

「流石にチャーチルもヒトラーには敵わなかったということか。北米連が血眼になるのもわかるな」

突然、部屋の隅にある電話が鳴り響き三池が出る。彼は受話器を静かに置いた後、用ができたと言い残り高官室を出た。

同刻、共和国帝都・紅城、国会議事堂――

共和国政府の意見は真つ二つに分かれていた。

「この戦争を終わらせるためには、話し合いしかありません」

と主張したのは交渉を訴える穏健派の高碕だ。これに対して報復を訴える急進派の柏葉は猛反発した。

「今の大東亜帝国は我が国などただの非国民の集まりだなどと言い、日本へ移民した同士は激しい差別と虐待を受けています。失礼ですが、貴方の言っていることで解決するとは思えない。平和のために今こそ、我々は立ち上がらなければならないのです！」

柏葉の発言に大勢の拍手が挙がる。これに高碕は反論した。

「かと言って相手の陣地へ乗り出したらそれこそ侵略行為です！私には出来るだけ血を見たくありません……」

「何を今更言っているのだ、キミは！ その国家の緩みが、戦争と言うものに巻き込まれたのではないか。現に軍隊の中では死者も出ているんだ」

他の議員からも同じような主張が飛んできた。高碕は何も言い返せなくなりそこに柏葉が付け加える。

「しかも、大東亜帝国はあのナチス・ドイツ第三帝国とも同盟を結んでいます。そうです、今やモスクワを一瞬でこの世から消し去っ

た輩の矛先がいつこの共和国に向けられるのか分からないのです。我々はそれを腕を拱いて見ているわけにはいきません。だから、それと手を組んでいる大東亜帝国を屈服させるべきなのです！同志よ、今立ち上がるのです」

柏葉の演説に大歓声が上がった。柏葉もそれに応えて手を振った。大統領は相変わらず顔をしかめている。そしてこれが、本格的な戦争の始まりの合図だった……

一方、北アメリカ連邦合衆国首都・ワシントンD・C、大統領官邸・ホワイトハウス――

「大統領、火炎共和国は支援を求めています。いっそのこと手を組んだほうがいいと思います……」

合衆国国務長官のコーデル・ハルは必死に大統領に直訴していた。「大統領、私はあのような国は大日本帝国と一緒に屈服させたほうがいいと思います」

合衆国海軍長官のウィリアム・ノックスは反論。連邦合衆国第三二代大統領、フランクリン・D・ルーズベルトは悩んでいた。正直、火炎共和国は厄介だ。莫大な資源と高度な技術力を保有し、今も進化し続けている。そこで火炎共和国はどうしても直接手中に収めたい。

最大の特典は東南アジアの市場が手に入るということ。だが……無理やり攻めるなら国民に批判され、辞任も覚悟しなければならぬ。かと言って攻めなければ内部の不満をおおることになる……一番厄介なのは巨大な未確認爆撃機と大国ソ連の首都・モスクワを一瞬で消滅させた謎の兵器・Nを保有するナチス・ドイツ第三帝国である。

マンハッタン計画を発動させ、一刻も早くあの兵器を完成させねば、我々に未来は無い。すでに独軍は原爆どころか国一つ破壊できる兵器を持っている。急がねば……

「だ、大統領！」

そのときであつた。副大統領のヘンリー・ウォレスが飛び込んできた。

「どうした?! 何が起きた!」

「ダッチハーバーとパールハーバーが攻撃を受けました! ほぼ同時です!」

「やはり、共和国の奴らだと思います。奴らは特殊工作部隊を持っていると聞きました。たぶんそいつらに違いありません! 大統領、攻撃の許可を」

ノックスの主張が正しければこれはよい口実になる。迷っている暇はない。だが派遣した艦隊は彼らの手中。

「ノックス君、艦隊の派遣を許可する。また、それらが合流するまで共和国の連中には行動を悟られるな」

この機会を逃して何をするか! この戦いは勝たねば意味が無いのだ!

ルーズベルトは早速、軍の緊急会議を開くことにした。アメリカもとうとう動くのである……

一方、大東亜帝国帝都・東京、軍令部――

大和強奪事件について陸軍と政府から激しい抗議を受け、海軍の地位は一気に下降し、混乱状態になっていた。

「そもそも、なぜ我が大東亜帝国が誇る戦艦大和がこうも簡単に盗まれたのだ!」

軍令部総長の永野修身は激怒していた。

「申し訳ありません。我々の防衛が不備であつたために。しかし、我々にはまだ同型の武蔵、信濃が残っています。しかもこちらにはあとすこしで実用可能な最新鋭超大型三胴戦艦・新羅があります」

聯合艦隊司令長官、山本五十六が答える。しかし……

「馬鹿者! 私はなぜ莫大な労力を注ぎ込んだ大和を共和国へ渡したのかと聞いているのだ」

「その点については本当に申し訳ございません。責任者は我々のほ

うで処分いたしますのでご理解を。我々はこの数ヶ月間、火災共和国を抹殺する計画を着々と進めてきました。今こそ、その計画を実行する時かもしれません。許可を」
そして、ついに山本の計画も実行される……

第五話…三国海戦

世歴一九四二年六月までに大東亜帝国は東南アジア及び豪州北部、シベリア・アムール川流域を制圧。

世歴一九四二年六月二十日、北米連邦は火炎共和国に宣戦布告。

そして世歴一九四二年六月二五日、太平洋上ミッドウェー諸島沖。北アメリカ連邦合衆国海軍太平洋第六艦隊旗艦、戦艦ノースカロライナー――

ワシントン海軍軍縮条約の条約開けとともに建造された新型高速戦艦の真新しい艦橋内。そこで紺碧の海を見つめる者がいた。米海軍太平洋艦隊司令長官のハズバンド・キンメルである。

「自分の陣地を自爆させておいて口実を作る。大統領も考えたものだ」

キンメルは皮肉の表情を浮かべて指示を出す。パールハーバーを攻撃したのは大東亜帝国の工作部隊によるものであったが、ダッチハーバーの爆発事件はタバコから引火した事故との噂だった。

「この作戦が成功すれば私は元帥の座に……」

同刻、米太平洋艦隊第16任務部隊旗艦、空母ホーネット――

「明日、ここが戦場になるのか……。」

第十六任務部隊指揮官、レイモンド・スプールアンスは甲板にいた。

「提督、ここにおられたのですか。」

下士官が駆け寄ってくる。

「何だ？」

「提督、艦長がお呼びです。作戦について最終確認したいと」

「分かった。すぐ行くと伝えてくれ」

そう言うのと煙草の火をもみ消し、頭上に広がる満天の星空を眺め

た。この様なところに血を流したくない……それが彼の本心であった。

翌日、南鳥島沖。大東亜帝国海軍連合艦隊旗艦、戦艦武蔵——
暁の太陽は反対側に大和型二番艦・武蔵の巨大な影を作り出す。
帝国海軍連合艦隊司令長官代理の栗田健男は艦橋でそれを眺めた。
「よし、これからカ号作戦を開始する。準備期間は十分にあったのだ。必ず勝てる。全艦へ打電」

これから、長い一日が始まったのである……

一方、火炎共和国首都・火城、軍総司令部海軍司令室——

「岩野レーダーサイトより報告。『ワレ、敵艦隊見ユ』」
管制官が報告する。

「司令！ミッドウエー諸島沖に米艦隊です！」

「北米連邦に出し抜かれた我々は完全に包囲されましたな、司令。
四面楚歌のこの状況、どうなされますか？」

少し早口で早見が問う。流石の早見も戦力の差を痛感していた。

「第一、第二、第三機動艦隊、廻林艦隊、響艦隊、葛西艦隊、山狭艦隊、防衛艦隊を出せ。最終防衛ラインを半径三百キロ以内へ設定する。敵は一機たりとも国内へ入れるな！」

久村はいつになく真剣な趣である。そして、傍らのアイスコーヒの氷はもう溶け始めていた。

二時間後、大火炎共和国領、マークス島沖——

火炎共和国海軍廻林艦隊新旗艦、大和では三池も指示を出していた。

「しかし、君とまた一緒に戦えるとはな」

「光栄です、長官殿」

戦艦雲河元艦長、穂坂はそのときの戦果で大佐へ昇進。戦艦大和艦長として、再び三池と一緒にになった。

「潜水艦、基、225に打電。中継ブイを設置、また、電算機も試したい」

電算機とはいわば初期的なコンピューターの仲間である。大東亜帝国から強奪した大和はその日のうちに乾ドックに移され、大規模な改装工事が施された。改修の主な内容は索敵機能の強化と電算機の試験運用、機動力向上だ。特に電算機を載せた理由は他にもあった。

「中継ブイ、設置完了。電波状態良好。異常なし」

「IR-53型電算機、起動！」

「電算機、起動します」

電機係が電算機に鍵を差込み、各スイッチを入れた。独特の機械音が艦橋に響く。

「広域レーダー、映りました。敵艦隊確認。総数、三十」

レーダー担当が報告する。成功した。三池はいつもの笑顔だ。

「第二種戦闘配備。とりあえず索敵システムは成功だ。おめでとう。続き、響艦隊に打電。『ワレ、敵艦見ユ』」

一方、同海域。共和国海軍響艦隊旗艦、大型空母サガミ――

共和国海軍が建造した初の艦隊型正規空母である。大きさ、性能は帝国海軍空母、大鳳と同等だ。

響艦隊は航空兵力を主とした艦隊で、他に大型空母三隻、護衛空母二隻、巡洋艦十隻、駆逐艦十三隻の大艦隊である。艦橋内はかなり騒然としていた。そのなか共和国海軍響艦隊司令長官の巖伊だけは冷静だ。

「航空部隊出せ。敵は近いぞ」

「廻林艦隊から入電。『新タニ北東ニ敵艦見ユ』」

電信係が読み上げる。

「分かった。廻林艦隊に打電しろ。『ワレ、北西ノ敵ヲ叩ク』」

しばらくしてそれが分かったように前方の廻林艦隊は回頭、北東へ向かった。

二時間後、遂に戦闘が始まった。

まず、先攻は大東亜帝国だった。次々と新型攻撃機、天山が飛び立つていく。

また、帝国が独逸ドイツの技術を学び開発した新型機、烈風も参戦した。共和国軍も新型艦上戦闘機、裁火を配備。外観は米国のF4Uコルセアそのもので、新型エンジンを搭載し、搭載兵器も新型の25mm機関砲を搭載。機動性と火力がアップしている。そして、また鉄の蚊柱が今度はあちこちで出来ていた。その姿は両軍に恐怖を覚えさせた……

一方、ミッドウェー諸島沖でも艦隊戦が行われようとしていた。火炎共和国海軍廻林艦隊旗艦、大和前方には空いっぱいに覆いつくす米軍機。

「射程、まだか！」

「入りました！」

射撃長の矢柳が答える。

「精密射撃、式式空中焼夷弾装填、一番、二番ヨーイ！」

大和の巨大な砲塔が旋回した。電算機処理が間に合わない……

「何をやっている！」

穂坂が怒鳴る。

「もうすぐ……」

雷撃機が魚雷投下高度に入った。皆に緊張が走る――

「撃てます！」

電機係が叫ぶ。

「よし！ 撃てーッ！！」

凄まじい衝撃とともに巨砲弾が打ち出される。雲河とは桁違いだ。しかしそれは米雷撃機が魚雷を投下した直後に炸裂、雷撃機は全滅した。が、

「魚雷接近！ 数、三四」

レーダー担当が叫ぶ。多すぎる。

「回避、面舵一杯、全速前進！」

間一髪のところで魚雷をかわした。直後、激しい衝撃に襲われる。

「本艦及び戦艦雲河に被弾！ 被害状況確認中」

そのとき、戦艦雲河が爆発と共に炎に包まれた。

「弾薬庫に直撃か。被害は」

「右舷後方中破」

三池は急いで傍らの駆逐艦朝風に戦艦雲河の救助作業をするように言った。雲河には千人以上の乗組員が乗っている。一刻の猶予もない。

「敵爆撃隊接近！」

一方穂坂は振り向きもせずに対空弾の発射命令を下した。

数後、そこにはもう米軍機の姿はなかった。なおも炎上する戦艦雲河。

「長官、救助は完了しましたが、もう雲河はだめです。処分を」

「許可する。ただし魚雷処分ではなく、砲撃で処分してくれ」

三池はそう言って艦橋を出た。穂坂は艦橋に残り、指示を出す。

「目標、雲河。一番用意」

瀕死の状態にある雲河を沈めるには一発で十分であった。

「撃てーッ！」

三発中二発が直撃、元廻林艦隊旗艦、戦艦雲河は大爆発して深い海の底へ沈んで行った……

そして、それを見ながら廻林艦隊の全乗組員が敬礼したのであった……

同ミッドウェー諸島沖。米海軍太平洋第六艦隊旗艦、戦艦ノースカロライナ――

「何?! 攻撃隊が全滅だ?! ええい、残りの航空隊をすべて導入しろ」

キンメルは思い切った指示を出した。

「しかし、それでは共和国本土へ攻める分が……」

「本国からまた取り寄せればいいではないか。とにかくあの艦隊を倒すのだ。」

“火炎共和国”^{フレーマー}め。たとえ“ジャップ”^{大東亜帝国}のモンスター戦艦を導入したところで我が合衆国が負けるはずが無かろう。いまに見ている。叩きのめしてやる！

同海域、米太平洋艦隊第16任務部隊旗艦、空母ホーネット——
「長官は何を考えているんだ。それでは“フレーマー”が攻めてきたとき対処できないというのに……」

スプールアンスは溜め息をついていた。

「迎撃機15機を残し他はすべてあげろ。三方向から挟み撃ちだ」

同刻、南鳥島沖、大火炎共和国海軍響艦隊旗艦、大型空母サガミ

敵の猛攻は留まることを知らなかった。

「魚雷接近！」

「取り舵一杯！」

「重巡草津、被弾！」

艦橋内は各係員の指示や報告が飛び交っていた。

「敵急降下爆撃機接近！」

「回避行動をとれ！」

さすがに巖伊も焦っていた。その時である。遙か前方に見える敵艦の中で閃光が走り、その直後に後ろにいた護衛空母が大爆発を起こした。

「何が起こった！」

「レーダーによると敵戦艦から砲撃された模様」

「敵も大和級を出してきたか……。全攻撃隊を出せ！」

命令した直後、今度は敵艦隊から花火が上がった。いや、それは

大日本帝国が開発した対空砲弾、零式弾の爆発であった。零式弾も式式空中焼夷散弾と同じ対空弾だったのである。

「第一攻撃隊全滅！」

「全航空部隊回避！全方向から攻撃しろ！」

その頃、南鳥島沖。大日本帝国海軍連合艦隊旗艦、武蔵――

「一番、三番に零式弾。二番に通常弾装填。急げ」

栗田が指示を出す。

「敵攻撃隊接近！」

「回避。副砲一番、二番、撃てーッ！主砲一番、三番まだか！」

「敵機魚雷投下！」

係員が叫ぶ。

「回避、面舵一杯、最大戦速！」

魚雷四本が命中し、かなりの衝撃に襲われる。

「左舷後部に被弾！浸水発生！」

「左舷後部隔壁閉鎖。右舷艦尾注水室、注水。第二戦速、面舵一杯。

主砲二番ヨーイ。」

前から二番目の砲塔だけが旋回する。

「撃てーッ！」

栗田が叫んだ。

同海域。大火炎共和国海軍響艦隊旗艦、大型空母サガミ――

「敵戦艦砲弾発射！」

「回避、衝撃に備えよ！」

サガミは間一髪のところまで巨砲をかわしたが、その衝撃で駆逐艦と衝突。

「左舷艦首大破！駆逐艦嵐、炎上中！」

「微速前進。戦場から離脱する。護衛に重巡洋艦、鎖駒をつけろ」
直後、衝撃と爆風で艦橋の硝子が碎ける。

「左舷後部、甲板中破。続いて魚雷接近！」

巖伊は齒を噛み締める。直後、右からの衝撃。

「右舷中破。浸水発生、第一機関室ほか損傷大！」

「これまでののか……」

巖伊は悟った。

同海域上空――

「小野寺、大丈夫か？」

そう聞いたのは第24航空隊隊長の邨田だ。

「何とか大丈夫だけど、あいつらに落とされるなよ。」

射撃手の小野寺が答える。そのとき、複数の戦闘機突風に混じって一機、旧式の戦闘機烈風が彼らの乗る攻撃機、青天へ向かってきた。

「ええい、前海戦の屈辱、ここで晴らす！」

大東亜帝国エースパイロット、城島信吾はまるで生き物のように烈風を操り攻撃機を次々と落としていく……

「次はお前だ！」

城島の烈風は邨田たちの乗る青天に向かって機銃弾を放つ。だが共和国軍の護衛機に阻まれ被弾。離脱を余儀なくされた。

「おのれ……今度こそ貴様らを叩き落してやるぞ！ 覚えていろ！
！」

城島はそう叫びながら、戦線を離脱した。

「小野寺、投下準備だ……。小野寺?!」

そのとき、烈風の放った機銃弾によりすでに小野寺は絶命していた……

「くそ！ 帝国め！」

そう言って邨田は青天を操り、敵艦隊へ向かった。

同海域。大日本帝国海軍連合艦隊旗艦、武蔵……

「戦艦陸奥、艦尾大破！」

「敵機接近！」

「全砲塔、零式弾装填。撃ち方ヨーイ。」

栗田はいつものように指示を出していた。しかし攻撃機が一機、正面から凄まじいスピードで対空弾幕を突っ切ってきた。

「正面から敵機接近！」

「構わん。撃て」

「小野寺の仇だ！！！」

邨田が乗る攻撃機、青天は艦橋へ一直線。しかしその直後発射された徹甲弾は青天を破碎。その後、空母サガミの艦首甲板を貫く。だが、直前に切り離された魚雷は武蔵の第二艦橋に直撃。構造物を吹き飛ばした。

こうして、栗田中将以下艦橋の過半数が死亡。指揮系統が潰れたことで形勢は一気に逆転。ようやく共和国の援軍が到着し、帝国艦隊の壊滅は時間の問題となった。

時は戻り、ミッドウェー諸島沖。

共和国海軍廻林艦隊と米海軍太平洋第六艦隊との戦闘はますます激化していた。

共和国海軍廻林艦隊旗艦、大和――

「敵魚雷接近！」

「回避！」

穂坂は必死に指揮していた。三池も腕を組んで必死に打開策を考えていた。

これ以上艦隊に損害を出すわけにはいかない。かと言って後退すれば本土が危険にさらされる……

そして、思いついた。

「レーダー、敵の位置は？」

「北北東、約三五〇km先です」

「よし。艦長、全速で敵艦隊へ突っ込んでくれ。旗艦を叩く」

皆が一斉に三池に振り向いた。当然である。こちらは大和を含む戦艦三隻、空母二隻、巡洋艦五隻、駆逐艦五隻。相手は戦艦六隻、空母四隻、巡洋艦五隻、駆逐艦十隻の大艦隊である。いくら大和と共和国が誇る最新鋭の艦が所属する廻林艦隊といえど、到底勝ち目はない。

「しかし長官、それでは犬死にするだけだと思いますが……」
穂坂も半ば啞然としていた。

「本当に敵艦隊に突撃するのではない。私もそこまで狂気ではないよ。このときのために大和、そして電算機があるのだ」

穂坂ほか艦橋内の全員が三池の考えを信じる。

「了解、長官。これより敵艦隊へ向かう。最大戦速」

同海域。米海軍太平洋第六艦隊旗艦、戦艦ノースカロライナ――

「ええい、まだあの艦隊を沈められないのか！」

キンメル苛立っていた。

「スプールアンスは何をやっている！早くあの“フレイマー”を倒せと伝えろ！」

同海域。共和国海軍廻林艦隊旗艦、大和――

「参式長距離弾を試す。精密射撃、一番、二番ヨーイ」

砲塔が旋回する、と同時に電算機も独特の音を出しながら計算している。今度は間に合った。

「撃てーッ！」

穂坂が叫んだ。轟音とともに飛び出した砲弾は直後に火を噴く。参式長距離弾はいわば砲弾というより弾道ミサイルのようなもので、電算機が軌道を計算。最適な角度で撃ち出した直後にロケットエンジンが作動して成層圏に達したところで落下し、目標を破壊する。いくら装甲が厚くても一撃で貫け、しかも高性能火薬で外れても被害を受けるまさに究極の砲弾である。

三池は九つのそれが天空に消えるまで見守り、次に広域レーダー

の動く小さな点を見た。

同海域、米太平洋艦隊第十六任務部隊旗艦、空母ホーネット――
「そのようなことを言っても倒せないものは倒せないというのに……」

スプールアンスは嘆いた。

「こちらの動ける航空機はもうたった20機程度しかないんだ」
当然である。ほかはすべて式式空中焼夷弾によって落とされているのだから。しかし、その直後、恐怖心そそる不気味な音が近づいてきた。スプールアンスは慌てて外へ飛び出た。そして、上を見上げて絶句した。

「か、回避行動！ 面舵一杯、全速前進！！」

スプールアンスが叫んだ。いきなりだったので艦橋内も戸惑ったが、すぐに作業を始めた。

スプールアンスが見たもの。それは共和国海軍廻林艦隊旗艦、大和が放った参式長距離弾が降って来る瞬間だったのである。直後、凄まじい衝撃が襲ってくる。砲弾の雨が降ってきたのだ。その衝撃はこの船を巨人が揺さぶっているようであった。

やっと揺れが収まり、スプールアンスは辺りを見回す。何人かはすでに起き上がっていた。

「提督、お怪我は」

下士官が聞いてきた。よく見るとあちこちに擦り傷がある。

「大丈夫だ。怪我はない。それより状況を報告しろ。いや、今の命令は撤回だ。まず生存者の救助作業だ。同時にダメージコントロール班を各部署に配置し、被害状況を調べろ。」

飛行甲板は無残に引き裂かれ、窓はすべて割れ、火災による煙が目にしみる。そしてキンメル長官が乗っているはずの戦艦ノースカロライナはかろうじて原型は保ってはいたものの上部は完全に破壊されており、とても長官が生きているとは思えなかった。それに向かってとりあえず敬礼をし、

「我が軍の船は今何隻残っている？」

「今駆動可能なのは本艦と空母サラトガ、戦艦アリゾナ、メリーランド、巡洋艦一隻、駆逐艦二隻ぐらいです」

スプールアンスは考えた。このまま海面に漂っている生存者を一刻も早く救助したいが、被害が大きく、とても乗せられる状態ではない……

「救難信号、打て。白旗も揚げろ」

「提督、前方の敵艦隊より入電です。『ワレ、救助活動ニ協力ス。但シ、空母を一隻譲渡スル事』」

すすにまみれて真っ黒になった通信係が読み上げる。

「それでよろしい。こんなポンコツなど喜んでくれてやる」

しばらくして、火炎共和国海軍廻林艦隊が姿を現し旗艦の大型戦艦が空母ホーネットへ接岸し、怪我人を次々と戦艦内へ運び入れていく……

そして、スプールアンスは共和国海軍廻林艦隊司令長官の三池と顔を合わせた。始めに握手を交わす。

「ようこそ、我が合衆国太平洋艦隊第16任務部隊へ。私が司令官のレイモンド・スプールアンスです。この度は敵である我が艦隊の救援活動ありがとうございます」

最初に口を開いたのはスプールアンスだった。

「こちらこそ」

実は三池とスプールアンスは前に会っていた。

それは二五年前、ゼネラル・エレクトロニクス社でスプールアンスが電気工学を習得中だったとき、三池もそこで電気工学を学ぶため留学していた。そしてたまたま同じ班にされ、二人は友となったのである。二人とも再開を機に今までの経緯を話し合いたかったが、この場でそんなことはできるはずもない。

「救助支援活動、ありがとうございます」

スプールアンスはそう言い残して一番被害の小さい戦艦アリゾナへ向かった。共和国軍は米空母、ホーネットを拿捕し米兵の救助に

あたたった。この救助支援活動で大勢の米兵士の命が救われたのは言うまでもない。

これは、その後彼が本国帰り損害責任で軍を解任されるときに言った名言である。

「このことで私の名誉は地に落ちるだろう……。ただ、数百の命が救われるなら私はどんなものでも喜んで渡す。以前、ミスター三池が『命よりも大切なものは何か』と聞いてきた。私はそれに答えられなかった。なぜなら、命よりも価値のあるものは無いからである……」

世歴 一九四三年六月三十日、アメリカ合衆国首都ワシントンD.C.、大統領官邸ホワイトハウス――

「何?! 我が合衆国太平洋第六艦隊が壊滅だ?!」

大統領のルーズベルトは報告を聞いて絶句した。そのはずである。北太平洋の二大列強国の大艦隊を火災共和国の艦隊は見事に撃退し本国には銃弾一発入れさせなかったからであったのだ。合衆国海軍長官のウィリアム・ノックスもこれには驚いていた。

共和国は建国されてからまだ日が浅い。だから日米は共和国を見くびり攻撃。結果として惨敗を喫したのである。共和国の電子工學技術は予想を遥かに超えていたのだ。

「おのれ、大火災共和国め。我が合衆国を本気で怒らせたみたいだな」

ルーズベルトはつぶやいた……。とその直後、副大統領のヘンリー・ウォレスがドアを蹴破るほどの勢いで突入してきた。

「だっ、大統領、独軍の新兵器“D”が南米に向かっています!」

「何だ?! それは本当なのか?!」

「はい。昨夜、哨戒機がはっきりと見ています。ただし、それ以来消息を絶ちましたが……」

ルーズベルトは机を叩く。グラスが音を立てた。

「今すぐ陸海空の全指揮官を集めろ! 急げ。“破滅の光”を絶対に

降らせるな！」

いかん。これではあの兵器が完成するまでに間に合わんぞ。

「大統領、オープンハイマー様よりお電話です」

執事が電話を取り大統領へ渡す。

「君か。あの兵器の開発は順調か？」

物理学者のロバート・オープンハイマーは大統領の口調から異常事態だと悟った。

「はい。予定では約半年後に……」

「遅い！それでは間に合わないのだ」

「しかし、そう言われても実験などがいろいろあり……」

「では全米中の物理学者を集めよう。期限は最高でも二ヶ月いや、来月中にだ！」

「……分かりました。必ず成功させます」

ルーズベルトは電話を切って外を眺めた。日光を反射して光る噴水が美しい。しかし、今の大統領の顔には開戦前の余裕など微塵も無かった……。

第六話：決戦 ミッドウェー

ホワイトハウスの会談から数日後、火炎共和国、木羅之基地——ここから六十機の戦略爆撃機、銀龍が飛び立った。

銀龍は帝国軍の一式陸上攻撃機と米軍の爆撃機B29を合わせて2で割ったようなもので外観は日本型爆撃機だが、性能はB-29以上だ。

十時間後、大東亜帝国帝都、東京上空——

東京上空は六十機の銀龍が覆いつくしていた。

「目標上空へ到達。これより攻撃を開始する。ランチャー、一番、二番用意」

格納庫が開き、箱のようなものが出てくる。

「攻撃、開始！」

直後にその箱は下に向かって火を噴き、次々と爆弾を撃ち出す。これが銀龍の主要兵器、十式対地掃射機だ。これは地面を貫通し地下司令部破壊用に作られた多連装ロケットランチャーで一機につき毎秒二十発もの対地ロケット焼夷弾及び対地飛散弾が撃ち出され、前者はその勢いで地下内に貫通、壕内を火の海にし、後者はその名の通りクラスター弾である。

しかし、ここでそれを使うことは結果として大虐殺を招いた。なぜなら、前者は地下を破壊するために作られたのなら当然民間の防空壕も破壊してしまい、後者はクラスター弾の恐ろしさを知っている人には言うまでもないだろう。したがって、このときの犠牲者は地球で言う東京大空襲の5倍にも膨れ上がったのである。

帝都東京は徹底的に破壊され、これにより東京にいた政治閣僚や山本五十六を含む司令官などほとんどが死亡。（天皇は危機一髪で脱出）そして大東亜帝国の国家機能は完全に麻痺した。後に帝国は大阪に臨時政府を移し、国家の建て直しをすることになる。しかし

三日後、大規模なクーデターが行われ帝国主義政権が崩壊。一週間後には大東亜帝国は日本国として火炎共和国へ講和を申請。両国は講和し、火炎共和国と日本は同盟を結んだのである。

その頃、南米、フランス領ギアナ――

「一番、二番撃てーッ！」

艦長のゲオルグ・ガーラーの指示で空中戦艦・デストロイアの巨大な砲塔が旋回しその砲身が火を噴く。

「十二時の方向から敵機！アメリカ空軍の模様」

「空中誘導爆雷用意」

艦橋の横からロケットランチャーのようなものが出てくる。

「撃てーッ！」

それから勢いよく飛び出した弾は対抗する米軍機に向かっていき、次の瞬間辺りが閃光に包まれた。それは米軍機が一瞬で消失した事を意味した。そして、二発目のN1が使用され、残存フランス兵は一瞬にして消え去ったのであった。

その後、デストロイアは中米パナマ運河、そして米国西海岸南部工業都市サンディエゴを地球上から次々と消しさらにアメリカ空軍の約五パーセントを削ぎ落とした。

まさに究極の兵器だ。主力兵器はほとんど核兵器でとくにN1で焼かれた大地は最低でも約百年間は放射能で汚染され、草どころか微生物でさえ生きられる環境ではなくなると言われており、まさにアドルフ・ヒトラーが求めた兵器そのものであったのだ。それ故に古代文明も“死の魔物”や“破壊神”等と名付けたのかもしれない……

そして、その一週間後に陸海空軍をつれてロサンゼルスに、さらにその一週間後にはサンフランシスコに侵攻。

独帝国相手に米軍も奮戦するが、デストロイアと後に続く新兵器により、後退する一方だった。

アメリカ合衆国首都・ワシントンD・C、大統領官邸・ホワイトハウス――

「何をやっているのだ君たちは！なぜあの“死の魔物”^{デストロイア}をそして独軍を合衆国本土へ入れたのだ！」

アメリカ合衆国第三二代大統領、フランクリン・ルーズベルトは怒りをあらわにしていた。

「申し訳ございません、大統領。しかし、いくら攻撃しようとしても、射程外から反撃されるので地上部隊、航空部隊は近づけないのです」

陸軍長官のヘンリー・スティムソンが恐る恐る答える。

「全米の陸軍部隊、航空機部隊、艦隊をすべて導入しろ！試作機もだ！」

ルーズベルトは恐れていた。デストロイアの矛先が自分に向くことを。そして、ロスアラモス原爆工場に独帝国軍が向かうことを……

その頃、火炎共和国領、岩野島近海。共和国海軍実験艦、ガイリユウ――

「電算機、異常なし。目標、ダミーバルーン」

「発射管一番、四式誘導弾装填、発射準備！」

四式誘導弾とは長年研究されてきた対地、対艦、対空能力を備えた無線誘導ミサイルで電算機で特定した目標に誘導、破壊することが出来る。

「四式誘導弾、撃て！」

発射管が火を噴き勢い良く白い棒が飛び出した。これがミサイルである。それは天高く舞い上がり、上空の大型風船に命中、大爆発した。成功である。

「おめでとう。これで我が国の国防力はますます上がる。早速司令部へ報告し、実用化しよう。」

共和国海軍廻林艦隊司令長官の三池はそこにいた。実は彼は物好きで、新兵器の実験には必ず顔を出すのだ。大抵の新兵器の採用、

不採用は三池の顔で分かる。今回は採用のようだ。技術者たちは胸を撫で下ろすと、すぐに作業を再開した。しかしこれを採用した三池にはある理由があった。それは、デストロイアの撃墜……

一方、ナチス・オメガ帝国帝都、ベルリン――

「さて、皆に聞くが、この地球上で最優先に消したほうが良いのはどこだと思うかね？」

総統であるアドルフ・ヒトラーは密かに会議を開いていた。

「皇帝、私は早期にアメリカを征服し、世界統一をしたほうがよろしいと思いますが……」

海軍元帥のカール・デーニッツが答える。

「皇帝、私はアメリカではなく火炎共和国を先に叩いたほうが良いかと……」

空軍元帥のヘルマン・ゲーリングが反論気味に答えた。

「たしかに、アメリカを先に叩いたほうが良いだろう。しかし、その技術力でアメリカの艦隊を壊滅状態へ追い込んだのが気に入らん。ゲーリング君、デストロイアに連絡しダッチハーバーを破壊後すぐに共和国へ向かわせる。そして、火炎と言う名の穢れた国をこの美しい世界から抹消するのだ」

ヒトラーはそう言う和高官たちを部屋から出し、大好きなチョコレートを口に含んで噛み締めた。ベルギーチョコレートの香り高い芳香と甘みが口の中に広がる。これがヒトラーの至福の時間だ。しかし、彼は知らなかった。このあと、計画の見直しを迫られることを……

そのころ、火炎共和国首都、火城、軍総司令部海軍司令室……

「どうしました？司令」

司令官の異常に気付いた早見が聞いてくる。久村は考えていた。

「今後のデストロイアの進路が気になってな。早見はどう思うか？」
逆に聞き返された早見は瞬間的に答えられずしばらく悩んでアメ

リカと答えた。

「私もそう思うが、アメリカならなぜ直接ソ連のように首都を叩かないか。なぜアメリカに侵攻するのに南米を経由したのか。なぜ西海岸だけを攻撃するのか……。不思議と思わないか？」

「そう言えば、情報によると内陸部で原爆という大量破壊兵器を製造しているとか。もしやそこかもしれないかも」

早見は断定的に言う。

「油断するな。いつ来るかわからん。国内の防衛能力を強化しておけ。それと、戦艦浅倉の近代改修はまだか。敵が侵攻して来るまでには完了させておけ」

久村は手元のアイスコーヒーを一気に飲み干した。

一週間後、北太平洋、アリューシャン列島沖。共和国海軍潜水艦、基一207――

「メインタンク注水！全速で沈降しろ！」

艦長が叫ぶ。五分前だった。彼らが哨戒の任に当たっていた時、突然独軍の潜水艦Uボートと鉢合せとなった。以後ずっと追いかけてられている。

「機関後進。敵の後ろにつけ！」

艦長の予測通り敵は止まりきれずに自分たちを追い越した。

「今だ！魚雷発射口一番、二番ヨーイ！」

魚雷発射口に魚雷が装填される。敵は全速で回避するが間に合わない。

「撃てーッ！」

二分後、敵潜水艦は木っ端微塵になり海中を漂っていた。

「浮上する。メインタンクブロー」

しかし、そこで待ち構える巨大な影があった。確認のために潜望鏡を上げた艦長は驚愕した。

「艦首右舷にデストロイア！ 本国に連絡！」

直後にそれが放った砲弾が潜水艦、基一207を撃ち抜き潜水艦

内で炸裂。

その後の状況は言うまでもないだろう。

一時間後、ミッドウェー諸島沖。火炎共和国海軍山狭艦隊旗艦、戦艦浅倉……

「遂に来たか……。本土には、絶対に入れさせんぞ」

響艦隊司令長官から山狭艦隊司令長官へ転属された巖伊はその艦橋から、地平線を睨んでいた。戦艦浅倉は十年前に建造された老朽艦だったが、このときのために大改装が施されたのである。主な改装点は主砲の撤去とミサイルランチャーの搭載、そして艦の高速化である。ミサイルランチャーには初の誘導多目的ミサイル、四式誘導弾を搭載。果たして、空中戦艦、デストロイアは倒せるのだろうか……

同海域。共和国海軍廻林艦隊旗艦、大和……

「我々は今、デストロイアに向かっている。無論決死の覚悟だ。皆最善を尽くし、共和国を死守せよ！以上だ」

三池の命令が作戦航行中の全艦隊へ流された。大和の艦橋内もこれまで無い緊張に包まれている。

「電算機、広域レーダー起動しろ！急げ！」

電算機、広域レーダーが起動し画面の隅に巨大な点とそれを囲むように無数の小さな点がある。デストロイアとその護衛機である。

「作戦展開中の全艦へ打電！『ワレ、敵大型空中戦艦見ユ。』第一種戦闘配備！」

「第一戦速、面舵一杯」

今ここに、超兵器デストロイアとの最終決戦が始まる……

最終話：暁の火炎

世歴一九四二年七月三十日、ミッドウェー諸島沖――

「一番、二番ヨーイ！」

すでに戦闘は始まっていた。先攻は空中戦艦、デストロイアである。
「撃てーッ！」

艦首の砲塔が咆哮し、巨大な砲弾が撃ち出される。それを横目に鋭いエンジン音を立てながら護衛機が過ぎ去る。

「馬鹿め、あと二時間ほどすれば大型戦艦も到着する。だがその前に一隻残らず叩き潰してやる」

艦長のガーラーは余裕綽々の様子だ。

同海域。火炎共和国海軍廻林艦隊旗艦、大和――

「敵空中戦艦主砲発射準備完了した模様！」

「全艦散開！回避しろ！」

三池が無線通信マイクに向かって叫ぶ。

「敵空中戦艦、主砲発射！」

「回避！面舵一杯、最大戦速！」

艦長の穂坂も叫ぶ。直後に衝撃。隣を航行中の巡洋艦に砲弾が直撃し爆沈したのだ。

「戦艦までも一撃で葬るとは。なんという破壊力だ………」

「敵高速戦闘機接近！」

「精密射撃、式式空中焼夷弾装填、全主砲ヨーイ！」

電算機の音とともに砲塔が旋回、
「撃てーッ！」

しかし、式式空中焼夷弾を数機の戦闘機がかわして向ってきた。

「護衛機が次々と墜ちて行きます！」

独軍が開発した初のジェット戦闘機メーサーシュミットHe262は初期のジェット戦闘機にもかかわらず高性能だったのだ。

次々におとされる共和国戦闘機……しかし、突然白い鉛筆の様なものがHe262に直撃、爆発した。後方を航行中の戦艦浅倉が誘導多目的ミサイル、四式誘導弾で迎撃したのだ。しかしこれで終わったわけでは無かった。

「ソナーに反応あり！数、十！」

索敵係が叫ぶ。

「各駆逐艦に連絡！潜水艦を近づけさせるな！」

三池もはじめて見るデストロイアの破壊力に恐怖を感じていた……

火炎共和国海軍山狭艦隊旗艦、戦艦浅倉――

「敵戦闘機、多数接近！」

「全ランチャー四式誘導弾装填！発射ヨーイ、撃て！」

巖伊の一言でミサイルランチャーから次々とミサイルが発射されていく……

「デストロイアより強力なエネルギー反応！」

「全艦に打電！回避しろ！」

直後にデストロイアから光が放たれ、右後方の響艦隊が跡形もなく消え去った。

「全艦へ打電。航空機部隊を突破しデストロイアに総攻撃をしかけろ！」

そう言って巖伊は悠々と空に浮かぶデストロイアを睨んだ。

同海域。ナチス・ドイツ第三帝国所属超空中戦艦デストロイア――

「見たか、我がナチスの科学力の粋を集めて作った陽電子砲の威力を！」

艦長のゲオルグ・ガーラーはそう言って机の画面を見た。

「N1、発射準備まだか」

「今調整中です。あと十分に撃てます」

「分かった。その間はガリアスで敵を討つ。一番、二番発射準備！」

火災共和国海軍廻林艦隊旗艦、大和――

「全速前進！一番、二番撃て！」

対空弾を撃ちながら共和国軍は蜂の群れのような航空機部隊を被害を受けながらも猛進する。

「左舷甲板に被弾。後部甲板中破。一番副砲使用不可」

被害係が被害を報告する。穂坂は表情を変えずにうなずいた。

「戦艦目隈轟沈。空母矢野右舷後方大破、戦線を離脱します」

「敵空中戦艦、主砲発射」

「精密射撃、参式長距離弾装填、一番、二番ヨーイ！」

その時である。一機の損傷した敵ジェット戦闘機が式式空中焼夷弾の装填された三番砲塔へ特攻した。凄まじい爆発音とともに恐ろしいほどの衝撃が後方から襲ってくる。

「さっ、三番砲塔使用不可！後方に大規模な火災発生！」

「消火しろ！急げ！弾薬庫に火が移れば終わりだぞ！」

三池が叫んだと同時に穂坂が、

「撃てーッ！」

轟音とともに撃ち出された参式長距離弾に火がつき、勢いよく天へ昇ってゆく。

火災共和国海軍山狭艦隊旗艦、戦艦浅倉――

「ランチャー一、二番誘導弾発射！ランチャー三、四、五番発射準備！」

浅倉から放たれたミサイルのうちの一発がデストロイアに当たり、爆発する。

「当たった！やっとアイツにダメージを与えられたぞ！このまま全弾命中させろ！」

巖伊が叫んだ。そのときだ。

「敵空中戦艦に動きあり。敵艦後部ハッチらしきものの開放！」

巖伊は一瞬考えそしてある結論へたどり着いた。

「ミサイル、砲弾。すべて撃ち尽くせ！腹がアイツの弱点だ！」

ランチャー全基、撃てーッ！」

空中戦艦デストロイア——
デストロイアではN1が調整を終え、発射態勢に入っていた。
だが後部ハッチが開放された直後、格納庫へミサイルが突入、爆
発。

「どうした！ 何が起こったのだ！」

「後部ハッチに直撃弾！ N1投下不可！」

直後、大和の放った参式長距離弾がデストロイアの巨大な船体を
貫いた。

「反応炉、炉心温度急上昇！」

ガーラーの机の画面に映っている緑のデストロイアの一部が赤く
光る。

「なんだと！ 緊急冷却装置を使い！」

「無理です！ ろ、炉心温度がもうすぐ臨界値を超えます！」

「止む終えん、炉心緊急閉鎖！ エンジン停止」

警報が鳴り響き、あちこちで爆発が起こった。

「このようなことで、我がデストロイアは、我が帝国は……！」

空中戦艦デストロイアはその巨大な船体を無様に晒しつつ、巨大
な火柱、水柱と共に海中に没した。

火炎共和国海軍廻林艦隊旗艦、大和——

「敵空中戦艦、完全に沈黙！ 敵艦隊も撤退してゆきます」

艦橋に歓声が上がった。三池も穂坂も胸を撫で下ろす。

救助作業がひと段落して、穂坂は艦橋を後にし、屋上の観測デッ
キへ向かう。階段を上り、重厚な鉄の扉を開けた。

そこには司令長官の三池が先に海を眺めていた。その顔には深々と
しわが刻まれていた。紺碧の水面には大量の残骸が漂っている。

「長官……」

しばらくの沈黙の後、三池が先に口を開いた。

「穂坂君。君はなぜ戦争が起きるかわかるかね」

穂坂は静かに首を横に振った。

「分かるわけではないだろう。それは誰にも分からない。ただ、分けることは人の中にはなにかがあるということなのだ。喜怒哀楽……。それが複雑に絡み合って社会というものが出来る。そして、そのうちの一つがなくなるとき、人々は怒り、憎しみあうのだ」

暁の海と空は真っ赤に燃えていた。それはまさに、天と地を貫く巨大な火炎のようであった……

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0459c/>

火焰戦記—FLAME OF RECORD—

2010年10月8日15時15分発行